

徳島市における3拍動詞アクセントの 変化の実態

上野和昭
仙波光明

0. はじめに
1. アクセント調査の方法
2. 調査結果と考察
- 2.1 3拍動詞第2類5段活用終止形アクセントの変化の実態
- 2.2 3拍動詞第2類1段活用終止形アクセントの変化の実態
- 2.3 両活用動詞終止形アクセントの変化の比較
- 2.4 調査項目・被調査者別にみた考察など
3. おわりに

0. はじめに

京都においては近世中期頃、3拍動詞第2類のアクセントはH型●○○（アクセントの高拍を●、低拍を○であらわす）であったが、現代では<5段活用>の「動く・走る」などはH0型●●●に、<1段活用>の「起きる・逃げる」などはL0型○○●に、それぞれ変化を完了している。これについて、京阪式アクセントの地域でも特に「古色を湛える」¹とされる高知市・和歌山県田辺市や同じく日高郡龍神村などでは、遅速の違いはあっても現在この変化が進行しているが、徳島市周辺地域もそのような変化の渦中にある。² 本稿は、同市における変化の実態の調査結果を報告することを目的とする。

1. アクセント調査の方法

この調査は、1991年12月から翌1992年1月にかけて、四国女子大学（現 四国大学）と徳島大学で筆者らの一人、上野が担当した授業の受講生の協力（付記参照）を得て実施されたものである。調査対象は徳島市に生育した男女とし、これを年代別に最低10人ずつは確保しようという方針で臨んだ。具体的には、街頭などで趣旨を説明して協力を依頼し、

承諾いただいた場合には、徳島市に生育したことを確認したうえで、用意した調査用紙の項目を読み上げてもらい、それを記録・録音して帰り、さらに検討する、という手順である。被調査者の年代別・男女別人数構成は《表1》に示したとおりである。

《表1》被調査者の年代別・男女別人数（単位：人）

| 年代 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代～ | 計 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|
| 男 | 8 | 9 | 8 | 6 | 6 | 8 | 4 | 49 |
| 女 | 7 | 19 | 6 | 10 | 17 | 5 | 9 | 73 |
| 計 | 15 | 28 | 14 | 16 | 23 | 13 | 13 | 122 |

ここに「70代～」というのは70代以上のことであるが、実際には13人中に80代と90代の女性それぞれ1名を含んでいるに過ぎず、ほぼ「70代」といってよい。

調査用紙に掲載した項目は、以下の3拍動詞第2類5段活用終止形23項目、1段活用終止形21項目であるが、³ 実際には、たとえば「[空が]はれる(晴)」のように語の意味を限定して、「腫れる」との混同を防ぐ手だてを講じた。また、読み上げに際しては、両活用が交互になるよう配慮もした。

5段活用：余る、急ぐ、痛む、祈る、祝う、動く、移す、恨む、思う、泳ぐ、担ぐ、乾く、曇る、絞る、作る、流す、残る、計る、走る、光る、防ぐ、守る、休む

1段活用：受ける、老いる、起きる、落ちる、掛ける、冴える、覚める、締める、過ぎる、攻める、耐える、建てる、垂れる、閉じる、投げる、撫でる、逃げる、延びる、述べる、晴れる、誉める

なお、調査録音は筆者らのほかに前述の学生（2大学合計36名）の協力を得たが、聞かれた音調の解釈また以下に述べる考察などは、すべて筆者らによるものである。

2. 調査結果と考察

この調査は、徳島市において、3拍動詞第2類5段活用動詞終止形はH1型●○○からH0型●●●へ、また同1段活用終止形はH1型●○○からL0型○○●へと変化している、その

実態を年代別につかんでみようという試みである。そのために、調査した項目を、実際には使用度に差があることを認めつつも、便宜ひとしなみに考えることにする。全部の項目について数人の徳島市生育者に確認もし、予備調査もして、まったく言わないというようなものは避けたが、なかには日常会話にはあまり使われない表現も含まれている（たとえば「[身体が] おいる（老）」など）。したがって、アクセント型選択に関わる類推的思考が、標準語的であり、文語的であるような語に対しても、どの程度働いているかということを含む調査として、ここでは考えることにする。本調査は、この意味での実態調査であることをはじめに確認しておかなければならない。

2.1 3拍動詞第2類5段活用終止形アクセントの変化の実態

まず5段活用動詞の場合、被調査者1人について、23項目の終止形をどのようなアクセント型で発音するかを調査した（《表2》参照）。主に聞かれるのはH1型●○○とH0型●●●であるが、ほかに●○●に聞こえる場合もある。これは末尾に強調的なイントネーションがかかった、H1型の臨時的実現と解釈する。H1・H0型以外は「その他」とする。また、1人の被調査者が1調査項目（語）について2種類のアクセントで答えた場合（無自覚的な言い直しも含む）は、それぞれを聴取回数1として数えることにする（以下同様）。

これをグラフにしたものが《図1》である。60代・70代以上ではH1型が80%以上に聞かれるが、40代・50代では60%台に落ち、以下急減して10代では3.6%の低率になる。これと逆にH0型は、60代・70代以上では10%台ながら40代・50代で20%台に漸増し、以下急増して10代では90%近くにまで達する。ともに40代以下での変化が、それ以上の年代に比べて急激である。H1型からH0型へと、その大勢が転ずるのは、およそ30代前後であるらしい。「その他」は全年代を通じて10%以下である。

2.2 3拍動詞第2類1段活用終止形アクセントの変化の実態

つぎに1段活用動詞について検討する。5段活用の場合と同様に、被調査者1人について、21項目の終止形をどのようなアクセント型で発音するかを調査した（《表3》参照）。主に聞かれるのはH1型●○○とL0型○○●である。ほかに少数ながら○○○のように上昇が顕著でない場合もあるが、これはL0型の臨時的実現と解釈する。H1・L0型以外は「その他」とする。

これをグラフにしたものが《図2》である。60代・70代以上でもH1型は50~60%程度で、すでに変化が進んだ状態からグラフにあらわれ、以下は10代の0%へと減少の一途をたど

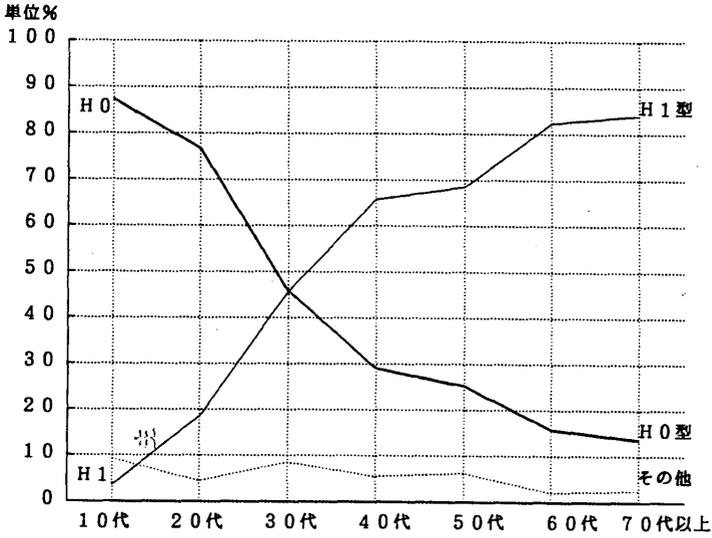
《表2》3拍動詞第2類<5段活用>終止形に聞かれるアクセント型の回数
 (単位:回 括弧内は、その年代における%)

| | H O 型 | H 1 型 | その他 | 計 |
|------|-------------|-------------|----------|-----|
| 10代 | 312 (87.2) | 13 (3.6) | 33 (9.2) | 358 |
| 20代 | 505 (76.8) | 122 (18.6) | 30 (4.6) | 657 |
| 30代 | 150 (45.75) | 150 (45.75) | 28 (8.5) | 328 |
| 40代 | 107 (28.9) | 243 (65.7) | 20 (5.4) | 370 |
| 50代 | 134 (25.3) | 363 (68.5) | 33 (6.2) | 530 |
| 60代 | 48 (15.8) | 249 (82.2) | 6 (2.0) | 303 |
| 70代~ | 41 (13.4) | 258 (84.0) | 8 (2.6) | 307 |

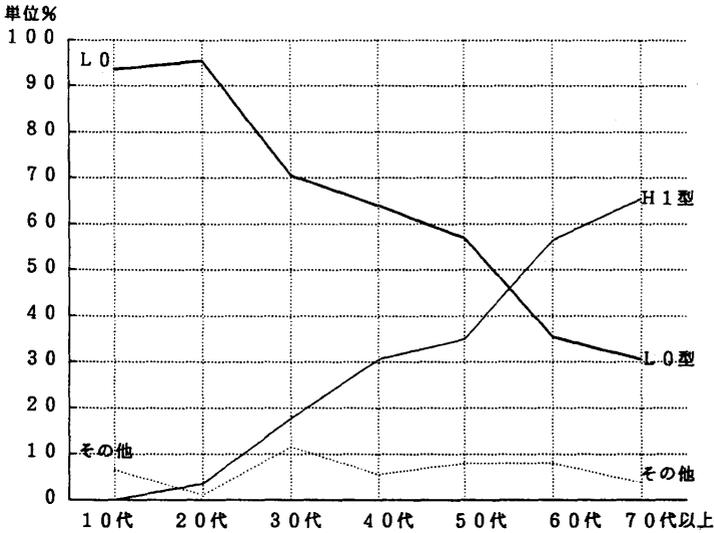
《表3》3拍動詞第2類<1段活用>終止形に聞かれるアクセント型の回数
 (単位:回 括弧内は、その年代における%)

| | L O 型 | H 1 型 | その他 | 計 |
|------|------------|------------|-----------|-----|
| 10代 | 302 (93.5) | 0 (0.0) | 21 (6.5) | 323 |
| 20代 | 565 (95.5) | 21 (3.5) | 6 (1.0) | 592 |
| 30代 | 214 (70.6) | 54 (17.8) | 35 (11.6) | 303 |
| 40代 | 217 (64.0) | 103 (30.4) | 19 (5.8) | 339 |
| 50代 | 279 (57.0) | 171 (35.0) | 39 (8.0) | 489 |
| 60代 | 97 (35.5) | 154 (56.4) | 22 (8.1) | 273 |
| 70代~ | 88 (30.6) | 186 (65.6) | 11 (3.8) | 288 |

《図1》3拍動詞第2類<5段活用>終止形に聞かれるアクセント型の年代別推移
 (縦軸は《表1》の括弧内の%を、横軸は年齢をあらわす)



《図2》3拍動詞第2類<1段活用>終止形に聞かれるアクセント型の年代別推移
 (縦軸は《表2》の括弧内の%を、横軸は年齢をあらわす)



る。これに対してL0型は、60代・70代以上で早くも30%台を示し、50代で50%を上回り、20代以下では90%以上になっている。H1型からL0型へと、その大勢が転ずるのは、およそ50代から60代であるらしい。「その他」は30代で10%を上回ったりもしているが、5段活用と同様にほぼ10%以下と言ってよかろう。

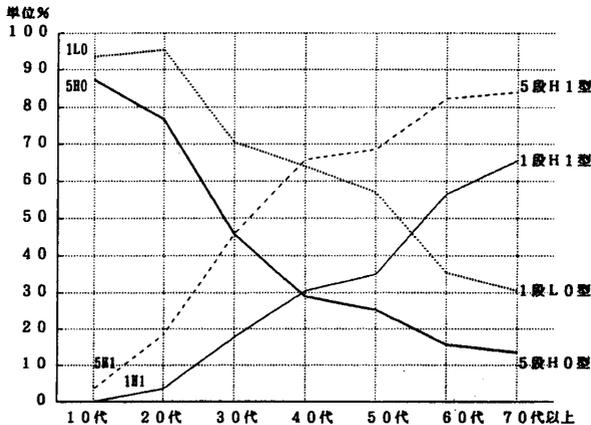
2.3 両活用動詞終止形アクセントの変化の比較

《図1・2》を、「その他」を除いてまとめると、《図3》のようになる。5段活用動詞の方が1段活用動詞よりも変化が遅い。両方の変化の時間的な差は、これを大勢の転ずるところで比較すれば、20年から30年程度と言えようか。

また、この図の誤差を念頭に置かずには推定するならば、あと10年から20年くらいすると、10代の若者においては、語によって例外はあるにしても、5段活用にはH0型●●●、1段活用にはL0型○○●しか聞かれなくなるであろう。そして、彼らが70代を迎える頃には、徳島市での変化は完了する。もちろん1段活用動詞の方は現在の10代においてすでに0%であるから、5段活用動詞よりも10年から20年程度早いことになろうか。

それでは、この変化のはじまりについてはどうか。図から5段活用動詞のH0型と1段活用動詞のL0型があらわれた時期を推定するのは難しいが、同じ程度の率で変化するとすれば、5段活用の場合でも100歳くらいまで遡るように見られる。1段活用にL0型があらわれた時期はさらに数十年以前のことであろう。

《図3》3拍動詞第2類<5段・1段活用>終止形に聞かれるアクセント型の年代別推移



2.4 調査項目・被調査者別にみた考察など

全体としての変化の実態は以上のとおりであるが、調査項目（語）別にみると、なお注意すべきことがある。

まず5段活用については、H1型からH0型への変化が他のものより先行しており、高年齢からH0型が聞かれる語がある。「祈る・祝う・守る」がそれである。なぜかは、いま明らかにしがたいが、早くから1類動詞と混同していたようである。

また、同じ5段活用の「作る」はH1型から30代あたりを境として、L0型○○●に移行して、1段活用と同様の動きをみせる。これは1段活用と語尾「る」が共通することや、無声化の傾向などが関係しているものと思われる。

つぎに1段活用動詞では、「老いる・閉める・述べる」の3語について10代でそのL0型の率がほんの少し低いことが気になる。そのため《図2・3》でL0型の頭がやや下がることになった。これはたぶんこれらの語が、あまり日常的でないからであろう。実際には、「[身体が] おいる(老)」「[戸を] しめる(閉)」「[意見を] のべる(述)」のように提示して発音してもらったわけであるが、日常的には「身体が弱る」「戸をたてる」「意見を言う」が使われるのではないか。そのために聞き慣れない語を1類や2類5段活用動詞に類推してH0型にしたり、東京アクセントと同様○●○のように発音したりした人がいたものと解釈する。

被調査者別にみると、東京アクセントと同じ○●○の音調を比較的多く発音する人が幾人かいた。40代のある女性の場合は、合計44項目中13項目にこの音調が聞かれた。この人は観光案内所勤務で、自分自身標準アクセントを用いているという意識をもっている。このほか50代の女性に同じく14項目にまで聞かれる人がいた。ほかは、聞かれてもみな一人につき10項目(回)以下で、一人に3回以上聴取されたのは5人であった。

東京(標準)アクセントの聴取回数は、5段活用動詞で全聴取回数の1.2%、1段活用動詞で同じく1.8%であるから、全体としてはきわめて低率である。

3. おわりに

このような、いくつかの京阪式アクセントの地域に共通してみられる変化については、服部二郎(1931)が高知や三重県亀山方言などを取り上げて説明したのがもっとも早い。金田一春彦(1955)は、この変化を京阪式諸方言の地域の差として述べているが、もちろん高年齢という、特定の年齢層のアクセントを各地で比較すれば、3拍動詞第2類1段活用を●○○という地方は同5段活用を●○○という地方よりもさらに狭いという結果が得

られよう。それは坂本清恵(1990)も指摘するように、1段活用が○○●に変化していても5段活用は●○○のままである場合がある、ということでもある。それをさらにアクセント史として時間軸の上に位置づけるならば、1段活用の変化の方が5段活用の変化よりも早かった、ということになる。しかし、現在これは京都や大阪など京阪アクセントの中心的地域においてはほぼ完了した変化であって、過去の文献を利用して、それらの地域の変化の実態を追おうにも、近世後期以降はしかるべき資料が無い。となれば、徳島などの現在変化が進行中の地域における実態調査は、そのままは言いがたいにしても、かつての京都や大阪の状況をさぐることにもなるのではない。

本報告は、この一連の変化が2段階に別れ、1段活用の変化の方が5段活用のそれよりも数十年早く進行していることを如実に示している。そして現代という時代にあっても、仮に100年を越える時間が変化の開始から完了までにかかっていることも明かになった。

また徳島市において、仮に「アクセント年齢」なるものを「精神年齢」などに倣って想定するならば、たとえば「余る」と「起きる」を発音して、ともに●○○という人は「アクセント年齢」の高年、前者を●○○といい後者を○○●という人は同じく中年、前者を●●●といい後者を○○●という人は同じく若年、というようなことも、戯れに言う限りではあるが、まんざら根拠の無い話でもない。

最後に、この変化はどのように起こったのか、ということにも言及すべきであろうが、これは終止形のアクセントを調査した程度では論じ尽くされない問題であり、本報告の域をはるかに越えているし、すでに別稿を用意しているのもいるので、それに譲りたいと思う。⁴

注(1) 金田一春彦(1974) 卷末付図

(2) 佐藤栄作(1989) 編『アクセント史関係方言録音資料』の高知・田辺・龍神・徳島などの資料から、このことが窺える。

(3) 金田一春彦(1974 PP.68-70)より抜粋。

(4) 上野和昭(1993)「京都方言アクセントの遷行—近世後期以降の3拍動詞類推変化についての考察—」『国語学』172

【参考文献】

金田一春彦(1955)「近畿中央部のアクセント覚え書き」『近畿方言双書』1,のち『日本語方言の研究』(1977 東京堂出版)に訂正して再録。

(1974)『国語アクセントの史的研究—原理と方法—』塙書房

坂本 清恵 (1990) 「丸本を資料とするアクセント研究の問題点」『国文学研究』100
佐藤 栄作 (1989) 編『アクセント史関係方言録音資料』アクセント史資料研究会
服部 一郎 (1931) 「国語諸方言アクセント概観(三)」『方言』1-4

【付記】

この調査に御協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。また、便宜を図ってくださった徳島市役所ならびに県立城内高等学校の村松龍先生にも感謝申し上げます。

なお、はじめにも明記いたしましたように、この調査は四国女子大学(現 四国大学)と徳島大学の学生のみなさんの協力が無くしてはできなかったものです。末尾で恐縮ですが、お名前を記して感謝の意を表したいと思います。(五十音順、敬称略)

四国女子大学文学部国語国文学科国文学コース1997年度4年生(30名)

石元規子, 岩村三恵子, 宇都宮容子, 浦川美保, 大寺ふき, 尾崎淳子, 河村陽子,
坂本 清, 佐藤美和, 篠原範子, 高島篤子, 竹村加代, 都築尚子, 中川さおり,
中村詠子, 成岡るみ, 野島真弓, 羽生なぎさ, 東 暁美, 日平充智, 藤田真美恵,
藤島恵子, 本田恭子, 増岡由紀, 松本めぐみ, 森脇幸恵, 山内美加, 山本美紀,
彌生佳寿子, 吉川千春

徳島大学総合科学部(国語国文学教室)1997年度3年生(6名)

阿部さおり, 岡井 晶, 岡本貴美子, 織田千絵子, 高塚あゆみ, 丸川和子

本稿は、筆者らの一人、上野が「徳島市方言アクセントの変化について—3拍動詞を中心に—」と題して徳島大学国語国文学会第11回研究会(1992.10.31)で発表した内容に基づくものです。

うえの・かずあき(総合科学部助教授)

せんば・みつあき(総合科学部助教授)